

## 比田井天来揮毫「浅岡先生頌徳碑」の採拓

・信州大学創立 70 周年・旧制松本高等学校 100 周年記念事業報告・

小林 比出代

### 1. 本事業の背景と目的

信州大学教育学部には、長野師範学校時代、信州教育及び日本の近代教育に貢献された先生方の頌徳碑が4碑建立されている。そのうちの1碑、「浅岡先生頌徳碑」で称えられる浅岡一は、明治 19(1886)年、長野県尋常師範学校に第4代校長として就任し、明治 26(1893)年に転出するまでの8年間、長野県教育界及び長野県尋常師範学校の興隆に尽力、「信州教育」の基礎を築いた中核として、日本の近代教育の進展に大きく貢献した人物である。すなわち、「浅岡先生頌徳碑」は、長野師範学校や信州教育の源流を現代に伝える貴重な文化資産である。

この碑の撰文は、明治大正時代の教育者、思想家として名高い杉浦重剛、揮毫は比田井天来に拠る。「現代書道の父」と呼ばれる比田井天来が「浅岡先生頌徳碑」を揮毫したのは50歳の時であり、この年に天来は、古典の臨書集『学書筌蹄』全20巻を刊行した。つまり、「浅岡先生頌徳碑」を揮毫した年は、天来にとっても節目の年にあたり、「浅岡先生頌徳碑」は近代日本書道史上においても看過できない名碑とされ、学外から当碑見学のためお越しになる方も多い。

しかし、本学においては、今日に至るまで本碑の拓本が採られていない。一般的に、貴重な文化資産となる石碑は碑面保全のために採拓する（＝拓本を採る）のが常であり、本学においても、これ程までの文化遺産は、拓本を採り、軸ないしは法帖に仕立て保管することが所有者としての責務であると考え続けてきた。ただし、「浅岡先生頌徳碑」の採拓は、碑の形状と大きさ（400 cm×140 cm）から、足場作りに始まる綿密な準備と高度な採拓技能を要し、専門の指導者と多くのスタッフが居なければ成り立たない。そこで、本学における記念の年を好機と捉え、その記念事業の一環として、

2. 採拓の工程 一田代秋鶴揮毫「正木先生碑銘」の採拓<sup>(1)</sup>より一

①

②

③

④

⑤

→ (表面) (裏面)

- ※大きな石碑のため、採拓者は足場を使って上段→中段→下段の順に作業する。ヘルメット使用。②以降も同様。

- (122)

- ③墨の用意（プレートに墨を出し，拓包に墨をなじませる）。
- ④拓包で打つ。
- ⑤はがして乾燥させる（ムラを確認する）。
- ⑥石碑を洗う（墨をとる）。

### 3. 本事業の実施工程と参加学生による発表内容

#### 一令和元年度信州大学教育学部学生書道展でのパネル原稿より一

はじめに，本事業における諸工程の実施日及び作業内容を列記する。

○令和元(2019)年5月14日(火) 午前9:00～午後1:00

足場設置／拓包づくり／碑面の大きさに合わせた拓本用画仙紙の準備

○令和元(2019)年5月16日(木) 午後4:50～午後6:00

石碑の清掃（碑面を水洗いする）

○令和元(2019)年5月18日(土) 午前8:15～午後5:30

採拓 午前9:00～午後2:00に3セット

午後3:00～午後4:30に1セット 計4セット

〔※軸装用1セット，法帖用1セット，予備1セット，練習1セット〕

次に，本事業内容を令和元年度信州大学教育学部学生書道展にてパネル発表するために書写書道教育研究室的の皆さんが作成した原稿から，採拓当日の記録〔小林が一部加筆〕と本事業に参加した皆さんの感想を紹介する。

#### 《採拓当日》

5月18日(土) 

8:15 集合・準備

各自，ジャージに身を包み，ヘルメットをかぶって集まった。

3尺×6尺(=90cm×180cm)の画仙紙を3枚で1セットにし，計3セット用意，予備として強風用の厚地の紙も1セット用意。

墨は拓本専用の「呉竹 墨拓」で，堅いスポンジに油性の墨が浸みた形でケースに収まっている。

石碑が大きいので上中下に分割して一回につき3枚で採る。

#### 9 : 00~11 : 00 1セットめ

強風が吹き荒れ、紙が伸びない。

風でどんどん乾き、乾いたところから剥がれ、もう一度張ると字が二重にぶれてしまう。

端から剥がれないように霧吹きで濡らし続けるが、表面だけが乾いて縮んでしまい、石碑の形に破れて剥がれ落ちてしまった。この回はあきらめて練習とした。

#### 11 : 00~12 : 30 2セットめ

元木さんが用意してくださった秘密兵器、強風用の厚い紙。

すんなり張れた。しかし、紙が丈夫な分、墨をたたく前の打ち込みが足りなかったのか、全面がぼんやりとした印象。

#### 12 : 30~14 : 00 3セットめ

風が止んできたので続けて採る。各自慣れてきたので作業がしやすくなった。ここまでの3セットの中では一番よく採れた。

#### 15 : 00~16 : 30 4セットめ

お昼休憩をはさみ、「これが最後」と決めて挑む。

動きはもう職人。コントラストが強く、ムラなくきれいに仕上がった。

#### 17 : 00 鑑賞会

402教室に持ち帰り、一枚ずつ出来映えを確認する。

法帖用は3セットめ、軸装にするのは4セットめで決定。

#### 《参加した皆さんの感想（抜粋）》

○普段は眺める程度になってしまう石碑の文字を間近で見たり、たんぽで墨をつけて浮かび上がる文字を見たりすると、石碑の字の線質や字形に注目でき、今まで見ていなかったものがはっきりと見えてきました。

白と黒の世界になると分かりやすくなりますね。

○紙に写すと、石に刻されている時よりも書いてある内容が読みやすくなった。また、文字の様子も、刻されているものを見るときは少し違うように感じた。採拓したものを臨書してみると、また違った見方ができるのかもと思った。

○地道で体力のいる作業だった。力加減や水加減が難しく、経験を積まないと美しい拓本を採ることはできないと感じた。

大きなものになればなるほど、作業人数が必要になるので、それだけ知識や経験、技術のある人が必要になる。今回の採拓は、専門家が一人、経験者が複数人いたことで成り立ったと思う。

○結構な肉体労働。事前に見た拓本の採り方ビデオのように優雅にポンポンするだけでは済まなかった。つかれた、筋肉痛！

暑い中、昼も抜かしてぶっ通しで3セット、合計4セットも仕上げたのは、ほんとうに職人魂だと思う。自分たちを労いたい。

○拓本採りの作業ですが、紙をつけるまでが大変ですね。たんぼで墨をつけ始めさえすればリズムカルですが…。今年度は高所での作業と風の強さが作業を難しくした大きな要因だと思いました。

○毛筆作品とは違う、芯の強さが碑にはあると思います。

しかし、「浅岡先生頌徳碑」は芯の強さがありながらも、筆の柔らかさや温かさを感じました。字形からも浅岡先生の人柄を物語っているのではないかと思います。

○出来上がった紙を402教室で広げたときには、言葉にできない感情が湧き上がりました。すごいな、自分たちでこれを作ったんだと、なんだか誇らしく思いました。

【注】(1) 小林比出代「ワークショップ「教育学部に存在する頌徳碑の拓本採り」  
—平成26年度信州アカデミア(信大COC事業)地域志向教育支援  
事業より—」(『信大国語教育 第25号』2015) pp.(49)・(53)

(こばやし ひでよ 信州大学教育学部)